

Title	表紙ほか
Author(s)	
Citation	ドイツ文学研究 (2005), 50
Issue Date	2005-03-01
URL	http://hdl.handle.net/2433/185478
Right	
Type	Others
Textversion	publisher

ドイツ文學研究

報告 第 50 号

2 0 0 5

京都大学人間・環境学研究科ドイツ語部会

目 次

エロスとパロディー

トーマス・マンのパウル体験と小説『ファウストゥス博士』
.....奥 田 敏 広 (一)

フンボルトの教養理念

——フンボルトからシュティフターへ
.....大 川 勇 (三)

訳註 ヘーリアント (救世主)

〈第15歌章—第20歌章〉
.....石 川 光 庸 (1)

When the mocking of the crows turned to whining.

The Salazar era and the Carnation Revolution in
Antonio Lobo Antunes' novel

O Manual dos Inquisidores (1996, *The Inquisitors' Manual*)

Part I

.....Engelbert Jorissen (63)

比較言語学と比較神話学 その2

.....河 崎 靖 (123)

バックナンバー 総目次

How to Cook a Good Tale — Three Stories from
Rohinton Mistry's Swimming Lessons and
Other Stories from Firozsha Baag(1987)

..... Engelbert Jorissen (65)

第48号(2003)

訳註 ヘーリアント(救世主)〈第7歌章—第10歌章〉

..... 石 川 光 庸 (一)

不気味さと反復強迫 ——フロイトの文化論的ペシミズムについて

..... 道 簇 泰 三 (二七)

Aspects of identity and hybridity in Carmo
D'Souza's Angela's Goan Identity(1994)

..... Engelbert Jorissen (1)

教養の「没落」

——ムージルの「シュペングラー・エッセイ」の余白に

..... 大 川 勇 (41)

第49号(2004)

「不気味さ(Unheimlichkeit)」再論 道 簇 泰 三 (一)

訳註 ヘーリアント(救世主)〈第11歌章—第14歌章〉

..... 石 川 光 庸 (1)

13世紀のイタリア人司教座聖堂参事会員が諭す

ドイツ宮廷のミンネ観 尾 野 照 治 (39)

比較言語学と比較神話学 (1) 河 崎 靖 (69)

The Colonial Virus in Literature:Medical and Colonial
Adventures in Amitav Ghosh's novel

— The Calutta Chromosome.A Novel of Fevers,

Delirium and Discovery (1996)

..... Engelbert Jorissen (81)

ドイツ青年運動におけるエロスと教育

——グスタフ・ヴィネケンをめぐる

..... 奥 田 敏 広 (元)

Post / Koloniale Gewalt und mentale Disfunktionen

in Antonio Lobo Antunes Roman Portugals strahlende

Grosse(O Esplendor de Portugal, 1984)

..... Engelbert Jorissen (1)

Germania-Romana (2)

「ゲルマンvs.ローマvs.ケルト」という図式

..... 河 崎 靖 (39)

第47号(2002)

タナトスの消尽

——「文化」の見方におけるフロイトとベンヤミン

..... 道 簀 泰 三 (一)

クラウス・マンの亡命小説『火山』におけるエロスと暴力

..... 奥 田 敏 広 (三)

ドイツ啓蒙主義の自我構造

——ゴットシェートの模倣理論を手がかりに

..... 石 田 明 文 (七)

Germania-Romana (3)

ゲルマン語のローマ、ケルトとの接触

..... 河 崎 靖 (1)

中世劇のテキストの評価について Dieter Trauden (19)

Leib — Gefühl — Raum — Zur Grundlegung der

Architektur — Ästhetik

..... 四日谷 敬 子 (37)

脱・「啓蒙の弁証法」としての『美の理論』

——「真理内実」の概念について

..... 道 旗 泰 三 (四)

ドイツ青年運動におけるエロスとナショナリズム

——ハンス・ブリュアーをめぐって

..... 奥 田 敏 広 (六)

タブーと言語 (1) 西 本 美 彦 (1)

Labyrinth der Identitäten und hybride Identität,

F. Pessoa und S. Rushdie — Reflexionen zu

F.M.Pinto, F. Pessoa und J. Saramago (4)

..... Engelbert Jorissen (39)

第45号 (2000)

母権論とロマン主義、あるいは歴史と神話

——ボイムラーのバッハオーフェン受容をめぐって

..... 奥 田 敏 広 (一)

中世ドイツの教育詩人トマジン・フォン・ツェルクレーレの

『異国の客』に映し出された悪魔像

..... 尾 野 照 治 (1)

Captain Marryat's Roman The Phantom Ship und

die Darstellung der Inquisition in Goa sowie

Vorüberlegungen zur Identität von Goensern

und ihrer Darstellung in Geschichte und Gegenwart

..... Engelbert Jorissen (25)

Germania — Romana (1) ゲルマンとラテンの間で

..... 河 崎 靖 (59)

第46号 (2001)

生きられた瞬間の暗闇 ——ベンヤミンと夢 道 旗 泰 三 (一)

- ベンヤミンと写真 道 簇 泰 三 (三)
- リオン・フォイヒトヴァンガーとアメリカ 奥 田 敏 広 (六)
- 西暦1200年前後のドイツの文芸作品に映し出された宮廷的理想像
——トマズイン、ハルトマン、ゴットフリートおよび
ヴォルフラムが見た宮廷世界より
..... 尾 野 照 治 (1)
- “Gegenidentität” in der Begegnung mit dem Andern
— Reflexionen zu F. M. Pinto, F. Pessoa und J. Saramago (2)
..... Engelbert Jorissen (33)

第43号(1998)

- 放蕩息子の帰宅
——リルケにおける新約聖書のモチーフ「放蕩息子」の意味
..... 稲 田 伊久穂 (一)
- ハイデッガーの言語(ロゴス)論
——アリストテレスとヘルダーリンを通して
..... 四日谷 敬 子 (四)
- アドルノとベンヤミン (1) 友情? 三 原 弟 平 (七)
- ムージルとライブニッツ 大 川 勇 (九)
- Seine nicht / eschnittene Haut retten:
Findung,Erfindung und Wiederfindung nationaler
Identität Reflexionen zu EM.Pinto,E Pessoa und J.Saramago 3.
..... Engelbert Jorissen (1)
- 「古低フランク語」文法の記述に向けて 河 崎 靖 (57)

第44号(1999)

- カフカとストロープ&ユイレ 三 原 弟 平 (一)

脱・「啓蒙の弁証法」としての『美の理論』

——「真理内実」の概念について

..... 道 旗 泰 三 (四)

ドイツ青年運動におけるエロスとナショナリズム

——ハンス・ブリュアーをめぐって

..... 奥 田 敏 広 (六)

タブーと言語 (1) 西 本 美 彦 (1)

Labyrinth der Identitäten und hybride Identität,

F. Pessoa und S. Rushdie — Reflexionen zu

F.M.Pinto, F. Pessoa und J. Saramago (4)

..... Engelbert Jorissen (39)

第45号 (2000)

母権論とロマン主義、あるいは歴史と神話

——ボイムラーのバツハオーフェン受容をめぐって

..... 奥 田 敏 広 (一)

中世ドイツの教育詩人トマジン・フォン・ツェルクレーレの

『異国の客』に映し出された悪魔像

..... 尾 野 照 治 (1)

Captain Marryat's Roman The Phantom Ship und

die Darstellung der Inquisition in Goa sowie

Vorüberlegungen zur Identität von Goensern

und ihrer Darstellung in Geschichte und Gegenwart

..... Engelbert Jorissen (25)

Germania — Romana (1) ゲルマンとラテンの間で

..... 河 崎 靖 (59)

第46号 (2001)

生きられた瞬間の暗闇 ——ベンヤミンと夢 道 旗 泰 三 (一)

- ベンヤミンと写真 道 簇 泰 三 (三)
- リオン・フォイヒトヴァンガーとアメリカ 奥 田 敏 広 (七)
- 西暦1200年前後のドイツの文芸作品に映し出された宮廷的理想像
——トマズィン、ハルトマン、ゴットフリートおよび
ヴォルフラムが見た宮廷世界より
..... 尾 野 照 治 (1)
- “Gegenidentität” in der Begegnung mit dem Andern
— Reflexionen zu F. M. Pinto, F. Pessoa und J. Saramago (2)
..... Engelbert Jorissen (33)

第43号(1998)

- 放蕩息子の帰宅
——リルケにおける新約聖書のモチーフ「放蕩息子」の意味
..... 稲 田 伊久穂 (一)
- ハイデッガーの言語(ロゴス)論
——アリストテレスとヘルダーリンを通して
..... 四日谷 敬 子 (四)
- アドルノとベンヤミン (1) 友情? 三 原 弟 平 (七)
- ムージルとライブニッツ 大 川 勇 (九)
- Seine nicht / eschnittene Haut retten:
Findung,Erfindung und Wiederfindung nationaler
Identität Reflexionen zu EM.Pinto,E Pessoa und J.Saramago 3.
..... Engelbert Jorissen (1)
- 「古低フランク語」文法の記述に向けて 河 崎 靖 (57)

第44号(1999)

- カフカとストローブ&ユイレ 三 原 弟 平 (一)

悲劇（トラウアーシュピール）としてのパサーージュ

——ベンヤミンにおける「覚醒」についての一視点

..... 道 簾 泰 三 (三)

ドイツ中世の騎士観 ——その基本構造を探索する

..... 尾 野 照 治 (1)

リルケ「新詩集」をめぐる考察－ 2 －

旧約聖書の2人の女性、「アビシャグ」と「エステル」

..... 稲 田 伊久穂 (空)

低地ドイツ語の通時的方言研究〈試論〉

——中世低ライン方言の書記法的考察に向けて

..... 河 崎 靖 (47)

第41号(1996)

放蕩息子の家出

——リルケにおける新約聖書のモチーフ「放蕩息子」の意味

..... 稲 田 伊久穂 (一)

ふたたび和刻本蘭語辞典『蕃語象胥』について

..... 石 川 光 庸 (三)

詩作の現在性

——パウル・ツェラーンのビュヒナー賞講演『子午線』

..... 四日谷 敬 子 (四)

ドイツ中世の女性教育と理想的女性像 尾 野 照 治 (1)

Begegnung mit dem Andern und Identität

— Reflexionen zu F.M.Pinto, F.Pessoa und J.Saramago

..... Engelbert Jorissen (41)

第42号(1997)

ヘルダーリンの最後の讃歌「ムネーモシュネー」

..... 四日谷 敬 子 (一)

Überlegungen zum Erzählen — Herbert Rosendorfer,

“Der Ruinenbaumeister”, Antonio Tabucchi, “Notturmo Indiano”

..... Engelbert Jorissen (41)

カフカ注釈 新注釈者カフカ 三 原 弟 平 (㉔)

ゲーテ的自然の unnaturality 内 藤 道 雄 (㉔)

ドイツ中世の格言詩人ヘルガーの心性 尾 野 照 治 (1)

悲劇と時

——ヘルダーリンのソボクレス翻訳への註解における悲劇論

..... 四日谷 敬 子 (㉔)

リルケ『新詩集』をめぐる考察－1－

旧約聖書を素材とした詩群における「預言者」像

..... 稲 田 伊久穂 (一)

第40号(1995)

封建時代の主君と家臣の付き合い方

——「レーエン法訴訟法書」が教えるもの

..... 高 津 春 久 (一)

後向きのベンヤミンの天使 ——「根源理念」批判的序言

..... 内 藤 道 雄 (㉔)

神秘主義の心理学

——ムージルの「境界体験」とギルゲンゾーン－1－

..... 大 川 勇 (㉔)

Vom Ende der Menschheit und Die Bibliothek von

Babel. Herbert Rosendorfer — Grosses Solo für Anton

..... Engelbert Jorissen (61)

芸術作品の時間性 ——リルケの造形芸術との出会いを手引きとして

..... 四日谷 敬 子 (㉔)

Der Begriff der Aura bei Benjamin und Adorno

..... Osamu Nomura (1)

第38号(1992)

人が行う神の裁き

——法書「ザクセンシュピーゲル」によって中世の裁判を考える

..... 高 津 春 久 (一)

エピゴーネンの文学史功績

——表現主義へのシュタードラー的ジョギング

..... 内 藤 道 雄 (三)

ドン・キホーテの愛、あるいは「倒錯」の創造性

——トーマス・マンの「最後の愛」をめぐる

..... 奥 田 敏 広 (七)

言語と歴史 ——ベンヤミンの「認識批判的序論」をめぐる

..... 道 簀 泰 三 (三)

中世ドイツの格言詩人シュペルフォーゲルの心的構造

..... 尾 野 照 治 (47)

古サクソン語(古低ドイツ語)簡約文法の試み 石 川 光 庸 (17)

ドイツ文学研究 総目次1号～37号(1952年～1991年)

第39号(1994)

中世ザクセン地方の法廷における審理の実状

——ヨハン・フォン・ブーフ「ラント法訴訟法書」にその詳細を読みとる

..... 高 津 春 久 (元)

万華鏡の破碎のあとに

——ベンヤミンにおける永劫回帰と弁証法的イメージ

..... 道 簀 泰 三 (三)

「アレゴリー＝文字」論

——ベンヤミンにおけるアレゴリーの射程——

..... 道 簾 泰 三 (二〇)

Das Freiheitsproblem bei Kant

——Anmerkungen zur Antinomienlehre der *Kritik der reinen Vernunft*——

..... Albrecht Decke-Cornill (1)

第36号(1990)

ゲーテとモーツァルトを結ぶもの ——父と母の相補性——

..... 芦 津 丈 夫 (一)

ユートピアの罫 ——表現主義時代の精神共同体幻想——

..... 内 藤 道 雄 (三)

ベンヤミンにおけるアウラの概念 野 村 修 (五)

ベンヤミンにおける「アウラ」の展開 道 簾 泰 三 (九)

13世紀の説教集に映ずるドイツ民衆の生活像

..... 尾 野 照 治 (22)

Aspekte der Kantrezeption im lutherischen Protestantismus

..... Albrecht Decke-Cornill (1)

第37号(1991)

アドルノにおけるアウラの概念 野 村 修 (一)

亡命作家ハインリヒ・マンの位置 山 口 裕 (三)

リルケの「窓」のモチーフ (下) 稲 田 伊久穂 (五)

商業の道義について ——中世の僧と哲学者の言葉から——

..... 高 津 春 久 (九)

ゲーニウスのパラドックス

——初期ベンヤミンにおける「同一性」と「非同一性」をめぐる——

..... 道 簾 泰 三 (二)

裏がえしの神学 あるいは

ベンヤミンの「せむしの小人」	三原 弟 平	(五)
ベンヤミンの名称言語をめぐる	道 簾 泰 三	(六)

第34号 (1988)

中世文学の叙述	高 津 春 久	(一)
『ベンヤミンの生涯』への補遺 二篇	野 村 修	(三)
ハインリヒ・マンの長編小説『首脳』について	山 口 裕	(五)
啓示体験と言語——ベームの場合	道 簾 泰 三	(六)
Gestörte Besprechung	Eckhardt Momber	(55)
ドイツ語統語論研究史 (3)	西 本 美 彦	(36)
Wackernagelの法則とドイツ文の文頭・文末構造		
——統率・束縛理論の立場から——		
	井 口 省 吾	(1)

第35号 (1989)

シーズレクのサガ 84～136章

——ヴェーレントの物語—— (その2)

	石 川 光 庸	(一)
--	---------	-----

十二世紀風刺詩の技法

——カルミナ・ブラーナのパロディーの解釈——

	高 津 春 久	(三)
--	---------	-----

リルケの「窓」のモチーフ (中)	稲 田 伊久穂	(五)
------------------	---------	-----

「表現主義」私観

——シンポジウム「いま「表現主義」を考える」のために——

	野 村 修	(七)
--	-------	-----

第31号(1985)

- ドイツ古代民謡とミンネザングの成立……………高津春久(一)
 ロシア美術とリルケ……………内藤道雄(二)
 カフカの「笑い」をめぐる……………三原弟平(三)
 R. M. リルケ 鎮魂歌(二篇)……………田口義弘訳(六)
 Warum einer schweigt
 — Zu Wolfgang Koeppens bislang letztem Roman
 „Der Tod in Rom” (1954) —
 …………… Eckhardt Momber (1)

第32号(1986)

- 高安国世編・訳日本の詞華集
 》Ruf der Regenpfeifer 《について(上)……………野村修(一)
 リルケ『オルフォイスへのソネット』における果実
 ……………田口義弘(三)
 シャンドス卿とフランシス・ベーコン……………小岸昭(三)
 シーズレクのサガ 84章～136章
 —ヴェーレントの物語— (その1)
 ……………石川光庸(六)
 ルカーチとDDRにおける文化遺産継承の問題
 ……………林功三(三)
 ドイツ語統語論研究史(2)
 —第1章 M. Luther から K. F. Becker まで(その2)—
 ……………西本美彦(1)

第33号(1987)

- 高安国世編・訳の日本詞華集
 》Ruf der Regenpfeifer 《について(下)……………野村修(一)
 リルケの「窓」のモチーフ(上)……………稲田伊久穂(三)

第29号(1983)

- ヴォルフ・ビーアマン 1982 野 村 修 (一)
- 宮廷歌人ラインマルとヴァルターのパロディー 〈L111, 22〉
..... 高 津 春 久 (三)
- ベッヒャーの訴訟事件について 小 寺 昭次郎 (六)
- ハインリヒ・マンの『呼吸』について
——忘れられた心理小説——
..... 山 口 裕 (九)

第30号(1984)

- ブレヒトの教材劇について
——『リンドバークたちの飛行』から『処置』まで——
..... 野 村 修 (一)
- 『C・W伯爵の遺稿より』とその周辺をめぐって
——リルケの中期から晩年への詩境の展開 (その四) ——
..... 稲 田 伊久穂 (二)
- ジャン・パウルと分身
——小説構造をめぐる覚え書—— 池 田 浩 士 (三)
- Das Theologische, Mythologische, Religiöse als
strukturebestimmendes Moment im *Doktor Faustus*
..... Eberhard Scheiffele (30)
- Der Name Wieland des Schmiedes
——*vísi álfa* in der Edda, *wis Weland* in Alfeds Boethius
und *witeye wurhte* in Layamons Brut ——
..... Mitsunobu Ishikawa (14)
- Der Herrenblick schon im ersten Weltkrieg
——Zu Ernst Jüngers „In Stahlgewittern“, 1920 ——
..... Eckhardt Momber (1)

第26号(1980)

詩表現にかかわる自然の二つの意味

——ドロステ=ヒュルスホフとメーリケの場合——

..... 内 藤 道 雄 (一)

反語的哀悼の詩作

——『ある女友だちへの鎮魂歌』におけるリルケ——

..... 田 口 義 弘 (三)

ON LINGUISTIC ARBITRARINESS Volker Beeh (1)

第27号(1981)

ハインリヒ・マンの歴史小説『アンリ四世』について

..... 山 口 裕 (一)

オクラホマ劇場 ——一九一四年の『アメリカ』——

..... 三 原 弟 平 (四)

Lemurenlächeln und Geometrie

——Zu „Die große Fracht” von I. Bachmann und

„Fensterinhalte” von H. Heißenbüttel ——

..... Eberhard Scheiffele (28)

Bemerkungen zur Evolution der Sprache Volker Beeh (1)

第28号(1982)

リルケの人形論 田 口 義 弘 (一)

アルヒポエータの告解の歌 高 津 春 久 (三)

Affinität und Wechseldurchdringung

——Zum Problem der Voraussetzungen ›interkulturellen‹ Verstehens——

..... Eberhard Scheiffele (29)

ドイツ語統語論研究史 (I) 西 本 美 彦 (1)

Weland — Velent — Völundr

——名エヴィーラント伝承の系譜（Ⅰ）——

..... 石 川 光 庸（1）

第24号（1978）

伝説と詩作 ——リルケ『マリアの生涯』をめぐる——

..... 田 口 義 弘（一）

新主体性論争 ——詩作の基盤として——

..... 内 藤 道 雄（四四）

Wege und Aporine der ›Rezeptionsästhetik‹

..... Eberhard Scheiffele（43）

Valenz理論における自然言語のパターン化とその「意味論」について

——特に G. Helbig と W. Bondzio の理論的対立をめぐる——

..... 井 口 省 吾（18）

Weland — Velent — Völundr

——名エヴィーラント伝承の系譜（Ⅱ）——

..... 石 川 光 庸（1）

第25号（1979）

宮廷恋愛詩の詩人と聞き手

——ヴェルター之歌「皇帝と吟遊詩人」の解釈を中心に——

..... 高 津 春 久（一）

Weland — Velent — Völundr

——名エヴィーラント伝承の系譜（Ⅲ）——

..... 石 川 光 庸（79）

Über die Relativkonstruktion bei der ersten und zweiten Person

..... Yoshihiko Nishimoto（41）

Thomas Manns ›Der Erwählte‹ in rezeptionstheoretischer Sicht

..... Eberhard Scheiffele（1）

Mir fällt zu Hitler nichts ein

——カール・クラウスと素材の問題にふれて——

..... 佐藤 康彦 (三)

ドイツ語における Modalität の概念とその文法構造 (1)

..... 井口 省吾 (1)

(注) 1974年度は発行されなかったようである。

第22号(1976)

中世格言詩の表現と世界像 (2)

——格言詩人としてのヴァルターとその後継者たちによる

テーマの展開——

..... 高津 春久 (一)

エルンスト・ブロッホの音楽哲学について 好村 富士彦 (六)

Leider zum Nachdenken — Das literarische

Chanson und das politische Lied Franz Josef Degenhardts —

..... Kenichi Sagara (1)

第23号(1977)

プロレタリア革命文学研究・その一

——W・フレーデルの「N & K機械工場」の評価をめぐって——

..... 林 功三 (一)

『C・W伯爵の遺稿より』とその周辺をめぐって

——リルケの中期から晩年への詩境の展開 (その三) ——

..... 稲田 伊久穂 (三)

Max Frisch — oder die Furcht vor der Entmenschlichung
der Gesellschaft

..... Manfred Hubricht (27)

Der „Hessische Landbote“ von Georg Büchner und Ludwig Weidig	Siegwart Berthold (1)
---	-----------------------

第19号(1972)

言葉の起源 ——ヘルダーの『言語起源論』について——

..... 芦 津 丈 夫 (一)

『魔笛』の系譜と通過儀礼 小 岸 昭 (四)

ホーフマンスタールの小説断片『アンドレーアス』をめぐって

——他の散文との関連において見た《フィナッツァー・ホーフ》——

..... 飛 鷹 節 (三)

HOFMANNSTHALS „ANDREAS“ — FRAGMENT

——*Kommentar und Kritik*——

..... Klaus Wille (1)

第20号(1973)

レッシング「ミンナ・フォン・バルンヘルム」への評価

..... 吉 田 次 郎 (一)

中世格言詩の表現と世界像

——フライダルクの「ベシャイデンハイト」の語法研究による——

..... 高 津 春 久 (九)

ジャン・パウル『レヴァーナもしくは教育論』入門

..... 池 田 浩 士 (六)

Brentanos Paradox

——Anmerkungen zu einigen Gedichten Clemens Brentanos——

..... Klaus Wille (1)

第21号(1975) (注)

ヴァルター・ベンヤミン伝のための三つの短章

..... 野 村 修 (一)

第17号(1969)

ジャン・パウルの現実否定と小説形式

——「カツェンベルガー博士の温泉旅行」——覚え書——

..... 池 田 浩 士 (一)

『言葉の格子』と詩の可能性

——パウル・ツェラーン覚え書——

..... 本 郷 義 武 (三)

ゲオルク・トラークル

——《Gottes Schweigen》について——

..... 平 井 俊 夫 (六)

技術の進歩と像の消滅

——マクス・ピカートの観相学に拠る断章——

..... 佐 野 利 勝 (七)

DREI LIEBESGEDICHTE VON GÜNTER GRASS

(“Liebe”—“Kirschen”—“Blutkörperchen”)

..... Siegwart Berthold (1)

第18号(1971)

ネリー・ザックスの世界

——詩集「死のすみかで」によせて——

..... 田 口 義 弘 (一)

ファウスト像の現代的問題性

——H・アイスラーの歌劇台本『ヨーハン・ファウストゥス』

をめぐる論争について——

..... 好 村 富士彦 (三)

ヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハの抒情詩

——あるオーバーゼミナールの記録——

..... 高 津 春 久 (六)

わが遍歴の旅 白 井 竹次郎 (九)

Carl Orff — der Erneuerer des Musiktheaters

Zum siebzigsten Geburtstag des Dichter-Komponisten

..... Kurt Hommel (1)

第15号(1967)

メーリケの童心に觸れて 白 井 竹次郎 (一)

トーマス・マン覚書 ——「魔の山」時代の政治と文学——

..... 林 功 三 (六)

ギンター・グラスの「ぶりきの太鼓」に就いて

..... 武 田 昌 一 (42)

Fräulein と Männin ——造語に関する一考察——

..... 塩 谷 饒 (23)

Zur Dramaturgie Gerhart Hauptmanns

Teil I : Das Urdrama Kurt Hommel (1)

第16号(1968)

ラオコオン群像をめぐる

——ウインケルマン——レッシング——ヘルダー——

..... 若 林 光 夫 (一)

「ゲーテのファウスト」研究について 梶 野 あきら (二五)

中高ドイツ語の動詞 mügen の一用法について … 石 川 敬 三 (1)

——書 評——

Heinz F. Wendt : Sprachen 塩 谷 饒 (15)

Walter Jung : Grammatik der deutschen Sprache

..... 武 田 昌 一 (22)

Zur Dramaturgie Gerhart Hauptmanns

Teil II : Das Nachtgeborene oder tragische Parabel

..... Kurt Hommel (30)

第12号(1964)

ゲーテの「様式」の概念について…………… 芦 津 丈 夫 (一)

「オルフォイスへのソネット」の世界とブノイマ的形象

——「オルフォイスへのソネット」論のノートから——

…………… 田 口 義 弘 (元)

初期のベッヒャー (その1) …………… 小 寺 昭次郎 (五)

第13号(1965)

「魔の山」の時間のこと…………… 吉 田 次 郎 (一)

作品「城」の成立 ——カフカ「城」論Ⅲ——

…………… 佐 藤 康 彦 (元)

Stadtluft — Professor Lausbergs Rhetorikbücher —

…………… J. E. Seiffert (53)

ハルトマンの叙事詩「エーレック」

——宮廷叙事詩の表現の寓意性について——

…………… 高 津 春 久 (27)

ドイツ語學覺書3 …………… 古 松 貞 一 (1)

第14号(1966)

ホーフマンスタールの悲劇への道…………… 飛 鷹 節 (一)

カフカの物語『歌姫ヨゼフィーネ、あるいは鼠の族』

…………… 高 木 久 雄 (三)

ドイツのプロレタリア革命作家同盟の成立について

——私的な覚え書きとして——

…………… 小 寺 昭次郎 (元)

約百記を読む記…………… 臼 井 竹次郎 (五)

我が半生 ——停年退官にのぞんで——

…………… 杉 山 産 七 (三)

ブレヒトの初期の詩について	野村修	(三)
エムリッヒの「フランツ・カフカ」に就いて	高木久雄	(四)
ゲーテの首陀羅について無駄話	臼井竹次郎	(六)

第9号 (1960)

ファウストの「忘却」の場面について	芦津丈夫	(一)
「チャンドス卿の手紙」について	小寺昭次郎	(二)
ヘルマン・ブロッホにおける小説の問題	林功三	(四)
ルカーチの典型論に就て	梶野あきら	(七)

第10号 (1961)

リルケ最晩年の詩

——特にフランス語の詩をめぐる——

.....	高安國世	(一)
-------	------	-----

「オペラ『マハゴニー』への註釈」の位置

——討論のひとつの材料として——

.....	野村修	(三)
最近のトーマス・マン研究から	吉田次郎	(六)
独逸語学覚書	古松貞一	(20)
ドイツ語学最近の動向	塩谷饒	(1)

第11号 (1963) (注)

Heidegger と Bloch	J. E. ザイフェルト	(1)
Sprachprobe の諸問題	塩谷饒	(47)
ドイツ語学覚書	古松貞一	(79)

(注) 発行が従来より遅れて62年度末の63年3月20日になったため、1962とあ
るべきところを1963としたもの。ただし、64年4月20日発行の第12号は
1964、65年3月10日発行の第13号は1965となっている。

マンフレート・ハウスマン管見	若 林 光 夫 (四)
ルッターの翻譯論	鹽 谷 饒 (五)
ミンネ歌人ラインマル	石 川 敬 三 (七)

第 5 号 (1956)

文藝に於ける現實性の問題

(近代ドイツ文藝史上のリアリズムに関連して) ...	梶 野 あきら (一)
ゲーテ・プロメーテイス断片について	臼 井 竹次郎 (三)
ミンネ歌人ラインマル (承前)	石 川 敬 三 (五)
ヘルダーリン論争	

——1956年度ヘルダーリン協会大会から——

.....	高 原 宏 平 (空)
獨逸語教授における發音の問題	鹽 谷 饒 (1)

第 6 号 (1957)

ゲーテの宗教敍事詩	臼 井 竹次郎 (一)
シュトルムの世界観	田 川 基 三 (六)
初期のブレヒトにかんする覺書	高 原 宏 平 (三)
東獨におけるヘルダー研究	吉 田 次 郎 (六)
ドイツのソネット	古 松 貞 一 (1)

第 7 号 (1958)

ゲーテの古典主義に就て (其の一)	梶 野 あきら (一)
「白馬の騎者」について	田 川 基 三 (二)
ゴットフリート・ベンと詩の問題 (一)	野 村 修 (四)
現在分詞一口語と文語における用法	塩 谷 饒 (1)

第 8 号 (1959)

ゲーテの古典主義に就いて (其の二)	梶 尾 あきら (一)
--------------------------	-------------

バックナンバー 総目次

第1号(1952)から第49号(2004)まで

第1号(1952)

Walther von der Vogelweideの宗教感情	石川敬三	(一)
「素朴文学と感傷文学」について	吉田次郎	(二)
「ペンテジレア」小論	田川基三	(三)
トーマス・マンのファウスト小説	臼井竹次郎	(四)
ウォルフガング・ボルヒェルト	若林光夫	(五)
獨逸語音の一考察	鹽谷饒	(一)

第2号(1953)

ヘルダーリン小論	高原宏平	(一)
ファウスト傳説とハイネ	杉山産七	(三)
グリルバルツェルの悲劇とその位置	森川晃卿	(四)
ブルクハルト・ニーチェ往復書簡	佐野利勝	(五)
„Ackermann ans Böhmen“の語法について	塩谷饒	(一)

第3号(1954)

ヘルダーリンにおける「犠牲」の問題(上)	谷友幸	(一)
ヘルダーリンに関する一考察	岩橋保	(二)
リルケと音楽	高安國世	(四)
グラッベの悲劇「ドン・ファンとファウスト」	杉山さんしち	(五)
エッカーマンについて	田川基三	(六)

第4号(1955)

トーマス・マンにおける藝術と藝術家の問題	吉田次郎	(一)
詩人と時代ヘルダーリンの讃歌をめぐって	岩橋保	(七)
讃歌「平和の祝祭」をめぐる論争から	高原宏平	(三)

INHALT

Toshihiro Okuda:

Eros und Parodie Thomas Manns Paul - Erlebnisse
und der Roman „Doktor Faustus“

..... (一)

Isamu Okawa:

Wilhelm von Humboldts Bildungsidee. Von Humboldts zu Stifter

..... (三)

Mitsunobu Ishikawa:

Heliand — Kommentar und Übersetzung

(Fittes 15-20)

..... (1)

Engelbert Jorissen:

When the mocking of the crows turned to whining.

The Salazar era and the Carnation Revolution in

Antonio Lobo Antunes' novel

O Manual dos Inquisidores (1996, *The Inquisitors' Manual*)

Part I

..... (63)

Yasushi Kawasaki:

Vergleichende Sprachwissenschaft und vergleichende
Mythologie (2)

..... (123)

Inhaltsverzeichnis der Hefte 1~49

ドイツ文学研究 報告第50号（非売品）

編集兼発行者 京都大学人間・環境学研究科ドイツ語部会

代表者 三 原 弟 平

2005年3月1日 印刷

印刷所 株式会社 田中プリント

2005年3月1日 発行

京都市下京区松原通麩屋町東入